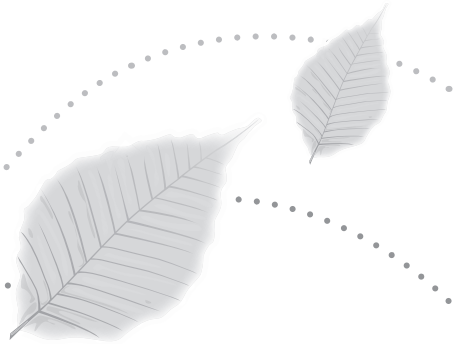


何かを感じる心を育てるために

中井 貴恵



一冊の絵本に魅せられて始めた「大人と子どものための読みかせの会」の活動も十年を過ぎた。活動を始めた翌年二〇〇〇年は「子ども読書年」なる年で、子どもたちに読書の習慣を身につけてもらおうと、政、官、財、教育、出版界をあげて「読書」に力を入れた年であった。公演に行く先々で、朝読という始業前の読書タイムや、読書週間に〇冊の本を全児童が読破することなど、各学校の取り組みを熱く語られたものだった。

思えば私自身、活字を読むのが遅く読書は苦手で、読書感想文や期限を決められて本を読まされたり、冊数を競い合ったりする読書は、苦痛以外の何ものでもなかった。はたして今の子どもたちは、本当にこの強制的とも言える読書を楽しんでいるのだろうか、ふと疑問に思った。

その読書年から十年たった今も、公演の冒頭で変わらず子どもたちにこんなことを聞いている。

「本を読むの、好きな人？」

すると、はーい！ とたくさん手が挙がる。しかしよく見てみると、手を挙げているのは圧倒的に低学年の子どもたち。次に「じゃ、正直言って、本読むの嫌いな人？」と聞くと、数名の子が先生の顔をうかがいながら手を挙げていいものか迷っている。なぜなら、本を読むのが好きな子⇨良い子、嫌いな子⇨悪い子というレッテルを先生に貼られるからだ。「いいのよー。だって、算数

なかい きえ 女優/エッセイスト

'78年映画「女王蜂」でデビュー。

朗読公演「音語り」を全国で展開中。今春、小津安二郎映画を題材にした東京公演開催。

公式サイト <http://nakaikie.com>

好きな人もいれば苦手な人もいる。体育だってそうでしょ？ 本読むの嫌いでもおかしくないよ。」
そう言うと、わあーっと手が拳がる。ほとんどが高学年の子どもたちだ。見てのとおり、読書離れは中学年を境に進んでいるのだ。

その一つの原因は、その年齢を境に大人が子どもに「声を出して本を読むこと」をしなくなるからではないかと、私は思っている。「いつまで大人に読んでもらってるのよ」「自分で読みなさい」と大人は勝手に読むことを放棄する。しかし子どもたちは、いくつになっても大人に本を読んでもらうのが大好きなのである。

私たちの読みきかせは、私が出して物語を読み、同時にしかけたつぷりの手作りの大型絵本を見てもらう。そして一人で本を読んでいるときには聞こえてこない音楽もいっしょに聴いてもらい、小さな絵本を自分の心の中で何倍にも大きな世界にしてみらうのだ。大切なのは物語を聞いて何を思ったか、何を感じたか。後日、この間聞いたお話の本ってどんな本なんだろうと、本を手にとってくれたらしめたものである。

私たちのレパートリーの一つ『ずーっとずーっただいすきだよ』は、愛犬の「死」を通して「命の尊さ」「愛することの大切さ」を伝える物語だ。一年生の教材になるのだから文章は平明でわかりやすい。しかし物語が放つメッセージはとても奥

深い。大人の心をも打ち「愛すること」の本当の意味を改めて考えさせられる。年齢差のある一年生と、六年生では同じ物語を聞いても何を感じるかは全く違ってくる作品なのである。

本の裏表紙に「○○向き」という表示があるが、六年生が「低学年向」と表示してある本を買いたいと言ったら、たいていの親は「ダメ！」と言って買わないだろう。しかし逆であったらどうだろう？ 一年生の子が「高学年向き」の本を買ってと言ったら、「えらいねー」とレジへ直行。即お買い上げとなるだろう。しかし、本は体のサイズにあった洋服選びと同じではない。年齢に関係なく、読みたいと思った本を読ませてあげてほしい。大人が気がつかないような大切なメッセージを子どもたちは本から確実に受け止めているのだ。

情緒豊かな子どもになるからと読みきかせをし、短時間で長文を読めれば受験の時に有利だからと読書をさせる。なんと悲しい発想であろうと思う。お母さんと布団の中でくっつきながら怖いお話を読む楽しさ、大好きな物語だから同じ本のページを幾度もめくる喜び。読書はもともと単純であるべきだ。

今は読書が嫌いでもいつか忘れられない一冊と巡り会うことだってある。読書嫌いだった私が今本とこんな関わり方をしているように、本と人の出逢いは計り知れないものなのだから。